

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13198

研究課題名(和文) 大学生の経験学習と人生の見通しの形成の関係構造についての理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and Empirical Research on Experiential Learning and Life Perspective in Higher Education

研究代表者

河井 亨(KAWAI, TORU)

立命館大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：20706626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：理論研究では、人生の見通しの形成の基盤にあたるアイデンティティ形成と学習の関係構造を析出した。アイデンティティ形成の3対モデルの視角から、社会的/個人的/自我アイデンティティの3水準にわたって、アイデンティティ形成と学習との関連を理論的に説明した。また、アイデンティティ形成と学習の関係構造が、リフレクション・プロセスにおいて、学びの深さと対話性・主体性をもたらすことを論じた。以上の知見を大学生の成長理論の近年の潮流と接続した。実践研究では、成長理論の援用と成長リフレクションのワークショップ・デザイン、学生への働きかけのあり方の省察を展開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大学生が将来を見通して成長していくとき、その土台にアイデンティティ形成のダイナミクスが働いています。本研究課題では、アイデンティティ形成の3対モデルから大学生の経験学習とアイデンティティ形成の関連性を捉えていきました。社会・個人・自我という3水準で形成されるアイデンティティ形成と学生の学びが相互に関連しあっていること、それがどのような関連性かを理論的に把握する作業を進めました。

研究成果の概要(英文)：The theoretical part of this research elaborated the relationship between student learning and identity formation in higher education. Identity formation is the base of student life perspective and its relationship with student learning develops through the triadic model of identity formation, which consists of social, personal and ego identity. Identity formation influences student learning, and vice versa, at these three levels. When the relationship functions, learning and identity formation mutually develop, but difficulties in this relationship force students to disengage from learning or fall into inactive identity formation. This research connects these theoretical perspectives and student development theory in college and applies student development theory to the contexts of experiential-learning-based practices such as internships. The practical part of this research also provides student development workshops and clarifies how to facilitate student reflection.

研究分野：大学教育

キーワード：大学生の学びと成長 成長理論 経験学習 リフレクション アイデンティティ形成

### 1. 研究開始当初の背景

若者の仕事とキャリア形成やアイデンティティ形成をめぐる不安定化、大学から仕事・社会への移行(トランジション)の不安定化を背景に、大学教育の果たすべき役割は大きなものとなっている。今日の大学教育では、教えることだけでなく、学生の学びと成長をいかに生み出せるかが重要な課題となっている。

大学教育では、活動への関与と認知プロセスの外化を軸とするアクティブラーニング、初年次教育や研究活動、プロジェクト活動を通じて学ぶPBLや地域活動の経験を通じて学ぶサービスラーニングや仕事の経験を通じて学ぶインターンシップ・コーオプ教育といった経験学習型教育実践が効果のある教育実践とされている(Kuh, 2008; Kuh et al., 2017)。

大学生の成長理論が示すように(Evans et al., 2012)、大学生はアカデミックな知的成長、異文化や多様性の理解深化、市民性の涵養、パーソナルな変容といった多面的な成長を遂げる。中でも、大学から仕事・社会への移行の不安定化という状況から、アイデンティティ形成を軸とするキャリア形成が重要な課題となる。大学生のキャリア形成をめぐって、実践と研究が蓄積されている(キャリア教育学会, 2008; 日本キャリアデザイン学会, 2014)。大学生のアイデンティティ形成とキャリア形成においては、将来の見通しの形成が1つの鍵概念となる(溝上, 2009; Kawai & Moran, 2017)。以上の背景から、本研究課題では、大学教育における大学生の経験学習とキャリア形成の関係構造の解明に取り組む。

### 2. 研究の目的

本研究課題では、大学生の経験学習がどのように将来の見通しの形成につながるのかを理論研究と実践研究を組み合わせて体系的に明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

理論研究では、将来の見通しの基盤となるアイデンティティ形成の基礎理論の検討、学習とアイデンティティ形成の関係性の検討を行った。また、大学生の成長理論の潮流を跡づける作業と接続を図った。大学生の成長の土台にアイデンティティ形成を据えたうえで、その成長プロセスとしてのリフレクション・プロセスについての理論的解明を進めた。それらと並行して、実践研究では、成長理論を枠組みとする学生の学びと成長の解釈、成長リフレクションを深めるためのワークショップ・デザイン、成長リフレクションへの実践的な働きかけへの省察を行った。

### 4. 研究成果

理論研究では、アイデンティティ形成理論を枠組みとした。アイデンティティ研究が多岐にわたる展開を見せる中、簡略化されたモデル(Simplified Identity Formation Theory: Côté & Levine, 2015=2020, p. 63)として図1の3対モデルが提起されている。

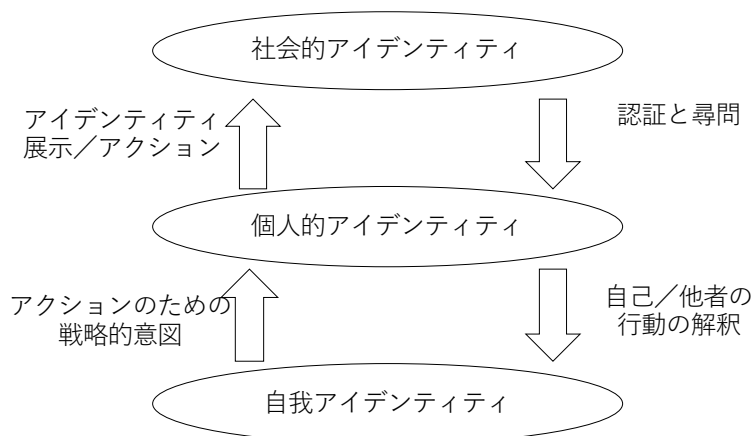


図1 アイデンティティ形成の3対モデル  
(出版社より許諾を得て転載、簡略化のため一部改変)

3対モデルは、アイデンティティを社会的/個人的/自我の3水準に分節化したうえで、それぞれの双方向の作用を定式化している。3対モデルは、社会構造と個人エージェンシーの相互作用の局面に焦点化して個人の心理ダイナミクスを視野の外に置くことはせず、また個人の心理ダイナミクスに焦点化して、文脈となる社会構造を無視することもしない。このモデルはまた、社会構造が個人エージェンシーを一方向的に決定するという想定には立たない。同様に、個人エージェンシーが社会構造や相互作用から遊離して無制限の自由裁量を振るえるとする想定にも立っていない。3対モデルは、簡略化されたモデルではあるものの、バランスの上に成立している。

		将来展望 計画・目的	
		－	＋
現在の行動 実験・探求 コミットメント	＋	反動的	プロアクティブ
	－	不活性	能動的

図2 アイデンティティ形成へのアプローチ  
(出版社より許諾を得て転載、簡略化のため一部改変)

3対モデルをベースとし、将来展望と現在の行動の2軸から、アイデンティティ形成へのアプローチが構築されている(図2: Côté & Levine, 2015=2020, p. 271)。第1に、自分の目標や信念を探求することに移れず、混乱した状態に沈むインアクティブなアプローチがある。将来の見通しを抱けず、そのような見通しを持つとすら思えない状態であり、主観的に安全・安心感を持たず、ふさぎこんでしまう状態である。第2に、自分の目標や信念といった展望を探求することはできるものの、行動に移すことができないリアクティブなアプローチがある。展望を持つといっても、将来への不安から「何かしないと」という不安ばかりが募るものの、新たな行動を実行できず、結果、不安が大きくなるといった悪循環が特徴となる。第3に、現在の自分のアイデンティティに基づく行動にはコミットしても、より良い適合をもたらすさらなる探求や行動にはコミットしないアプローチは、アクティブなアプローチと名づけられる。このアプローチでは、今の自分の見えている視界や地平というものを超えていかず、自分の居心地のいい領域(コンフォート・ゾーン)を超えて挑戦をしないことが次なる成長への壁となっている。最後に、自ら目標や信念といった展望を持って、今までの自分の経験や成長の壁を超え、新たな挑戦をし、自分自身の世界を広げる経験へ積極的に探求・実験するプロアクティブなアプローチがある。プロアクティブなアプローチでは自分1人のことだけでなく周りの他者も巻き込んでいたり、社会との関係を含んでいたりすることで、展望と行動に広がりがある。

将来の見通しの構成概念をここに位置づけることができる。「将来の見通し」という構成概念は、将来展望と現在の行動の2つからなる(溝上, 2009)。「将来の見通し」という概念では、日常の行動の前に、すべきことの意味があるかどうかを挟むものの、基本的な骨格は相同である。また、人生目的研究とも類似する点がある。人生目的研究では、自己主導型目標という将来展望の軸と Beyond the Self という自己関心にとどまるか他者へと開かれていくかという軸から人生目的を分けて研究している(Damon et al., 2003; Kawai & Moran, 2017)。前半の軸は将来展望に相当し、後半の軸は現在の行動のクオリティをさらに分節化する軸と位置づけられる。

以上のアイデンティティ形成のダイナミクスを下敷きにすることで、主体的・対話的で深い学びやOECDのOECD Future of Education and Skills 2030プロジェクトで柱に据えられているエージェンシー概念を精緻に捉えることができる。エージェンシーは無条件に無制限に発揮できるようなものではない。3対のアイデンティティ形成が分化・統合・連続性の動態において学習の基盤となるという作用と、学習が自己・他者・知の同一平面上の並置という対話的・変容的な自己形成につながることでアイデンティティ形成に作用すること、それらが常に機能する好循環というわけではなく、機能不全になりうる点についても理論化された。

大学生の学びと成長に関する理論研究として、大学生の成長理論の動向を跡づける作業を行った。近年の理論動向として、大学生の社会的アイデンティティの相互作用という相互行為の文脈を問い直すことを通じた成長と、自分の信念やアイデンティティや社会関係といった自身との内的関係(対自関係)を構築する能力を意味するセルフ・オーサーシップの成長へと拡張していることが明らかにされた。さらに、大学生の成長理論、プロフェッショナル教育理論、サービスマーケティング研究、アイデンティティ形成理論からリフレクション・プロセスを多角的に総合し、アイデンティティ形成を土台とするエージェンシーの発揮条件について理論的な精緻化が進められた。

実践研究としては、経験学習教育実践の重要な形態であるインターンシップでの学生の学びと成長に大学生の成長理論を援用する研究が行われた。そこでは、学生のエージェンシーが平板ではなく変動しながらも持続的に粘り強く発揮されるあり方が示された。また、成長リフレクションの実践的な形態として、ワークショップ・デザインを行った。身についた力とその経験エピソードを発散と収束を繰り返しながら具体化していくことで意義深い成長リフレクションが生み出されることが示された。学生の成長リフレクションへの働きかけのあり方として、分析するよりも前に状況と心境を記述することの重要性が明らかにされた。

- Côté, J. E., & Levine, C. (2015). *Identity formation, youth, and development: A simplified approach*. New York: Psychology Press. (河井亨・溝上慎一訳 (2020). 『若者のアイデンティティ形成——学校から仕事へのトランジションを切り抜ける』 東信堂)
- Damon, W., Menon, J., & Bronk, K.C. (2003). The development of purpose during adolescence. *Applied Developmental Science*, 7(3), 119-128.
- Evans, N.J., Forney, D.S., Guido, F.M., Patton, L.D. & Renn, K.A. (2009). *Student development in college: Theory, research and practice (2<sup>nd</sup> edition)*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Kawai, T., & Moran, S. (2017). How do future life perspective and present action work in Japanese youth development?. *Journal of Moral Education*, 46(3), 323-336.
- Kuh, G. D. (2008). *High-impact educational practices: what they are, who has access to them, and why they matter*. Washington, D.C.: Association of American Colleges and Universities.
- Kuh, G. D., O'Donnell, K. O., & Schneider, C. G. (2017). HIPs at ten. *Change: The Magazine of Higher Learning*, 49(5), 8–16.
- キャリア教育学会編 (2008). 『キャリア教育概説』 東洋館出版社.
- 溝上慎一 (2009). 大学生生活の過ごし方から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—. *京都大学高等教育研究*, 15, 107-118.
- 日本キャリアデザイン学会 (2014). 『キャリアデザイン支援ハンドブック』 ナカニシヤ出版.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Kawai Toru	4. 巻 5
2. 論文標題 A Theoretical Framework on Reflection in Service Learning: Deepening Reflection Through Identity Development	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Education	6. 最初と最後の頁 275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/feduc.2020.604997	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 河井亨・岩井雪乃・和栗百恵・大山牧子	4. 巻 41/ 2
2. 論文標題 経験学習型教育実践で学生にどのように働きかけるかー学生への働きかけをめぐる実践知についての省察ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 53-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 河井亨	4. 巻 40
2. 論文標題 大学生の成長理論の動向 Student Development in College 第3版を手がかりとして	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会システム研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 河井亨	4. 巻 38
2. 論文標題 アクティブラーニングおよび主体的・対話的で深い学びと学生の成長のあいだにはどのような関係があるのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会システム研究	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 今川新悟・河井亨・真田樹義	4. 巻 19
2. 論文標題 課外自主活動における学生の成長ワークショップによる成長調査を通じて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館高等教育研究	6. 最初と最後の頁 111-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 河井亨	4. 巻 24
2. 論文標題 大学生の学習とアイデンティティはどのような関係にあるのか 学習とアイデンティティ形成の3対モデルの縫合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 67-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高澤陽二郎・河井亨	4. 巻 24
2. 論文標題 大学生の成長理論を通してみる 長期インターンシップ経験学生の成長とその要因	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 溝口侑・酒井淳平・河井亨
2. 発表標題 ロールモデルとキャリア発達・アイデンティティ形成の関係についての縦断的検討
3. 学会等名 日本教育工学会 2021年度春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 兵藤智佳・岩井雪乃・平山雄大・二文字屋脩・和栗百恵・佐野香織・河井 亨
2. 発表標題 「体験の言語化」実践におけるオンラインの課題と可能性
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 兵藤智佳, 二文字屋脩, 林田由那, 和栗百恵, 佐藤しおん, 山内あかり, 河井亨
2. 発表標題 「体験の言語化」と「専門知」
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 河井亨・岩井雪乃・和栗百恵・大山牧子
2. 発表標題 経験学習型教育実践で学生にどのように働きかけるか
3. 学会等名 大学教育学会題41回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 兵藤智佳・佐野香織・菅新汰・和栗百恵・河井亨
2. 発表標題 「体験の言語化」の多分野への展開とその可能性
3. 学会等名 第25回大学教育研究フォーラム発表論文集
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計4件

1. 著者名 ジェームズ・E・コテ、チャールズ・G・レヴィン、河井 亨、溝上 慎一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 若者のアイデンティティ形成-学校から仕事へのトランジションを切り抜ける	

1. 著者名 河井亨	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 訳者解説：学校から仕事・社会へのトランジションにおける若者のアイデンティティ形成ー理論・実証研究・実践的な議論を繋ぐことの意義	

1. 著者名 村上紗央里・新川達郎・木村充・河井亨	4. 発行年 2021年
2. 出版社 「わたしと公共」教育・研究プロジェクト	5. 総ページ数 14
3. 書名 身の回りの社会から考える わたしと公共ワークブック	

1. 著者名 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター編・分担執筆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 144
3. 書名 ボランティアで学生は変わるのか	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------